

レオン三世政權とテマ

中 谷 功 治

はじめに

ビザンツ史上七世紀中頃から八世紀は、しばしば「暗黒時代」と呼ばれる。それは同時代に執筆された史料が皆無に等しく、しかもこの時期を扱った史料記述の情報量も他の時代に比べて圧倒的に乏しいことに起因している。

史料情報の貧困さに加えて、その背後にある時代状況もまた「暗黒時代」と呼ぶにふさわしいものであった。六世紀までの地中海帝国としてのローマの面影は、東方からのイスラーム勢力の攻勢、北方からのスラヴ人、アヴァール人、ブルガール人などの異民族の侵入と定住により急速に失われた。七世紀の終わりともなると、帝国に残された領土は、小アジアとバルカン半島の沿岸・島嶼部くらいとなっていた。⁽¹⁾西方に卡ろうじて残された支配領域も、イタリア半島南部とシチリア島を除けば、次々と外敵に浸食されていった。やがてそのシチリアも九世紀に喪失へと向かうことになる。要するに、「帝国」とは名ばかり、時代状況もまた「暗黒時代」を迎えていたのである。⁽²⁾

このような時代を考察しようとするならば、あまり細部にはこだわらず、より長期的なスパンで時代の趨勢の把握に努めるのが適切であろう。筆者はそのような観点から、かつて七世紀中盤から九世紀初頭を「テマ反乱の時

代」と捉えて、当時のビザンツ帝国の権力構造のあり方を検討した。⁽³⁾ただし、このような研究姿勢は、大局的な見方に立つという点では利点はあるものの、個々の出来事の微細な動きを見落としてしまう危険性がないとはいえない。

筆者が以前に依拠した研究は、おおむね長期的な展望をもとに執筆されたものが多かったが、⁽⁴⁾最近では個別の論文も含めて、皇帝ごとのモノグラフィ研究などが盛んに登場するようになってきた。⁽⁵⁾その背景には、印章資料の活用を含めて、プロンポグラフィ研究に大きな進展が見られたことも見逃せないだろう。⁽⁶⁾

最近の研究状況から影響を受けるかたちで、この国においても、より時期を限定して、皇帝ごとの政權や政策の特徴に焦点を当てる研究が小林功氏によって発表されている。小林氏の関心は多方面に及ぶが、本稿が取り扱うレオン三世については、二つの論文が国内の主要な学会誌に掲載されている。⁽⁷⁾その内容は筆者が考え、また提示してきた視点とはいささか異なる要素を含んでいたり、さらには対立するケースもあるようである。

けれどもレオン三世は、筆者の八世紀ビザンツ理解に欠かすことのできない存在である。それだけに、小林氏の見解を正面から受け止めて、これまでの自分の説について一度反省してみて、その上で補強が可能な場合はそれを実施するのが誠実な対応だろうと考えるに至った。繰り返しになるが、史料の乏しい「暗黒時代」について、限られた時期に焦点を当てて考察することは、ややもすれば推測や仮説が多くなるきらいがある。以下ではそのことを十分に承知した上で、議論の限界をしっかりと認識して考察を進めたい。なお本稿では、紙幅の関係もあり、ビザンツ艦隊に関する議論は別稿に譲ることにした。

以下、焦点は最終的にはレオン三世の政權基盤とし、筆者が考える八世紀前半のビザンツ帝国像を再提示してみた。言うまでもなく、議論の中心はテマが占めることになる。けれども、小林氏が力説する「中央政府の有力者たち」の存在についても、同時にできるだけ注視していくことにしたい。ともかく、筆者の関心は皇帝個人の経歴や資

質にはあまりない。問題とするのは、誰が、あるいはどのような勢力が皇帝政權を支えていたのか、という点である。

一 七世紀のテマ

テマの成立は混沌としている。一般にテマ制と呼ばれるものは、帝国各地に設置された軍管区^{テマ}において、その指揮者であるストラテegos（将軍）が徴税・裁判などの行政権全般をも掌握する制度のことである。つまりテマとは軍管区であると同時に行政区でもあった。ストラテegosには「テマ長官」という訳がより適切なものとなるだろう。しかし、史料上でこの軍事行政制度の確立がはっきり確認できるのは十世紀を待たねばならず、ほぼ確実だろうと判断できる時期としても八世紀後半あたりとなる。⁸

「テマ」という用語自体は七世紀初頭から『テオフアネスの年代記』に登場する。⁹しかし、ここでのテマは「軍団」という意味で用いられている可能性がきわめて高く、実際八世紀になってもこの年代記に登場するテマという用語、あるいはアナトリコイなどの個別の軍管区を指す具体的名称も大半は「軍団」を意味するものであった。

テマという用語が、当時は政府公認の正式な名称でなかった可能性もある。というのも、『テオフアネスの年代記』に並ぶこの時代の基本史料、コンスタンティノール総主教ニケフォロス [5301] の『歴史抄録』¹⁰においては、具体的な軍管区名には必ず「いわゆる」と付けられており、さらに直接的には「テマ」という名詞は一切登場しないからである。

さて、具体的な軍団名として『テオフアネスの年代記』に最初に登場するテマは小アジア北東部のアルメニアコイ

であった。六六七年ないし六六八年、アルメニアコイ軍団^{テマ}のストラテegosであるサボリオス [6476] が皇帝に対して反乱を起こした。サボリオスはベルシア系の人物（シヤブル）で、イスラーム側のシリア総督のムアーウィアに同盟をもちかけたため、一時事態は緊迫した。けれども、進軍中のサボリオスが不慮の事故がもとで死亡すると、反乱は政府軍との正面衝突を前にして瓦解した。⁽¹¹⁾

翌年には、今度は小アジア東部の軍団、アナトリコイに動きが見られた。『デオファネスの年代記』には次のよう⁽¹²⁾にある。

「さて、アナトリコイのテマの者たちがクリュソポリス（首都のアジア側の対岸）に到来して言った。「我々は三位一体」を信じる。（皇帝の兄弟）三人を戴冠するように」。⁽¹³⁾ コンスタンティノス（四世） [3702] は困惑した。というのは彼一人が加冠され、彼の兄弟たちはいかなる権限をも持たなかったから。そこでパトリキオス（最上級の爵位⁽¹⁴⁾）のコロネイアのテオドロス [7312] を派遣⁽¹⁵⁾し、彼らを賞賛して欺き、彼らの指導者たちに町（首都）に入り、元老院と協議して、彼らの意思をなすようにと連れて来た。すぐさま皇帝は彼らを向こう岸のシユカイ（ヨーロッパ側ガラタ地区）で絞首台に吊した。彼らはこれを見て名誉を傷つけられて、嘆きの内に自分たちのところへと帰った」。

（括弧内は中谷による補足、以下同様）

このように小アジアのテマ（軍団）が中央政府の動きに異を唱え始めたことがうかがえるが、政府要人からなる元老院にも威信が残っていたようであり、事態は深刻化せずにすんだ。なお、元老院が皇帝の改廃に主導的に関与した事例が、コンスタンティノス四世 [3702] の父コンスタンス二世 [3691] の即位時にも確認できる。⁽¹⁶⁾ 当時まだ十歳のコンスタンスは元老院を前にして、自分の即位について彼らに謝意を述べたと年代記は記している。⁽¹⁷⁾

小アジアでは七世紀中にさらに二つのテマが設置された。首都に近接する北西部のオプシキオンと西部エーゲ海沿

岸のトラケシオイである。前者のオブシキオンについては同じコンスタンティノス四世の治世、六八〇―一年の第六回全地公会議の主催者側の臨席リストにその指揮官の名前が登場する⁽¹⁸⁾。

彼の官職名は他のテーマのストラテegosとは異なり、コメス(ラテン語の comes より。後の中世ヨーロッパでの「伯」とされていた。しかも、この官職を有するテオドロス [7345] は、居並ぶ政府要人たちを差し置いて、このリストの第二位につけていた。第一位は文官トップのマギステル・オフィキオールム⁽¹⁹⁾のニケタス [5342] であった。さらに注目すべきは、このリストには他のテーマのストラテegosは一切登場せず、武官としては儀仗兵団の長であるエクスクビトルのコメスが登場するのみであった⁽²⁰⁾。

それから数年後の六八七年、コンスタンティノス四世の息子、ユスティニアノス二世 [3556] の名義で教皇に送られた命令書簡 iussio の中に、前述の第六回全地公会議の決定を確認する人々のリストが登場する⁽²¹⁾。ただし、ギリシア語のテキストは残っており、以下はそのラテン語訳である。(以下、便宜上、中谷が番号を付けた)

「①われらが教父、つまり至聖にして至福の総主教たち、汝等が至福の使節 apocrisario とともに、②至聖の元老院、③ここ帝都に滞在する神の愛でたる府主教および主教たち、そして次いで④聖なる宮殿 palatii のスコラで軍務にある者たち⁽²²⁾、⑤そしてさらに「民衆の組合からも et ex collegiis popularibus」⁽²³⁾、⑥またエクスクビトルから、さらに加えてキリストから愛された諸軍隊から、すなわち⑦「神によって守られたる皇帝の従者(軍)から ab a Deo conservando imperiali obsequio」⑧また東方の者から ab Orientali と⑨トラキアの者からも Tracisiano-que」⁽²⁴⁾ ⑩同様にアルメニアの者からも ab Armeniano、⑪ならにイタリアの軍から、⑫次いでカバリシアニから ex Cabarisanis と⑬セプテンシアニ et Septensianis から、⑭あるいはサルディニア(島)から⑮その上、アフリカ軍からである」。

以上の記述から判明することを述べていこう。まず、中央政府は各軍団を形式的にせよ掌握していたらしいこと、またその序列は元老院や儀仗兵団などに比べて高くないような書き方となっている。軍隊に関連しては、まず⑦の「神に守られたる従者（軍） obsequium」とはオプシキオン軍団のことである。⁽²⁴⁾ 次いで⑧「東方の者たち」とはギリシア語で表現すればアナトリコイとなる。さらに⑨「トラキアの者たち」とはトラケシオイ、⁽²⁵⁾ そして⑩「アルメニアの者」とは、アルメニア人ではなく、アルメニアコイを指す。以上が小アジアのテマ軍である。

⑪のイタリア軍とはラヴェンナ総督麾下の軍隊であろうか。⑫のカバリシアニとはカラビシアニの誤記で、ギリシア語のカラボン（艦船）⁽²⁶⁾ からきたカラビシアノイ（水兵／船員たち）のラテン語訳と考えられる。おそらく艦隊（海軍）のことを指すのであろう。⁽²⁷⁾ ⑬セプテンブシアニとはセプテム要塞（北アフリカ北西岸、現セウタ）の軍隊と考えられる。当時、西地中海の⑭サルデーニャ島がビザンツ領であったこともここから判明する。そして⑮アフリカ軍とはカルタゴ総督府の軍隊であらう。⁽²⁸⁾

以上、このリストからは、教会中心の視点からではあるが、七世紀後半の時点で帝国の皇帝政府を支える存在が確認できる。いくらか不明な点が残るものの、史料の性格から見て、先ほどの公会議のリストと併せて判断するなら、オプシキオン軍団の特殊性が特に目立つ。オプシキオンは後世には確かにテマとして確認されるのだが、⁽²⁹⁾ この七世紀後半の時点では、トップのコメスは他のストラテegosとは地位や立場を異にしており、政府要人であった可能性が高い。そのため、彼が率いる軍隊の地位も全体の筆頭格にあったことが判明する。実際、オプシキオン軍団の前身は、六世紀の皇帝直属軍 *praesentiales* であったと思われるだけに、以上のような特別な扱いは何らおかしくはなかっただろう。以下、オプシキオンはこの時点では、単なる一地方の軍団^{テマ}以上の存在であった、ということを中心に留めて考察を続けたい。

二 混乱期のテーマ

小アジアの一部のテーマに不穏な動きが見られはしたが、この時点で「テーマ反乱の時代」の到来を声高に主張するにやや難がある。テーマなどの軍事力が政治に大きく介入してくるのは、ユスティニアノス二世が失脚する六九五年以降の混乱期のことであった。

この時期、二〇年弱の間に七回とめまぐるしく皇帝位が交替した。以下では、政治の流れを確認するとともに、皇帝ごとに政権基盤に関わる情報を主要な登場人物などから確認していくことにしよう。

(a) 六九五年、レオンティオスによる帝位篡奪（首都でのクーデタ）

レオンティオス [4547] はユスティニアノス二世の第一治世期にアナトリコイのストラテegosを勤めたが、六九二年に投獄され、なぜかこの年にテーマヘラスのストラテegosに任じられる。彼は現地へ赴任しようとするが、周囲の説得などもあり、クーデタを決定して帝位に就いた。⁽³¹⁾

年代記の関連箇所で見られるレオンティオスの友人としては、カッリストラトス修道院の修道士パウロス [5778] とかつ「クレイスーラ」⁽³²⁾ 長官を勤めたカッパドキア人グレゴリオス [2358]（後にフロロス修道院の修道士、さらに院長）の二名のみ。

牢獄から解放された人々をはじめ、首都の民衆がユスティニアノス二世を呪って、ヒッポドロームにて皇帝の鼻を削ぎ、舌を切って、ケルソン市に追放した。暴れた群衆はさらに修道士で税務長官のテオドトス [7904] と財務長官

のペルシア人ステファノス [931] を捕らえて足を縛って大通りを引き回し、そして生き埋めにしたという。

(b) 六九八年、艦隊の反乱とアブシマロス（ティベリオス三世）擁立

北アフリカの総督府があるカルタゴ市の奪回に向かった艦隊が、最終的に使命を全うできず、ロドス島まで戻ってきたところで将兵による反乱が勃発した。彼らは「コリュコスに拠点を持つキビュライオタイのドウルンガリオス⁽³³⁾」のアブシマロス [933] を擁立し、皇帝ティベリオス三世と彼の名前を変えて都へ攻め上った。首都コンスタンティノープルでは、住民の中に反乱軍への裏切り者が出て、首都は陥落した。レオンティオスは鼻を削がれて、修道院送致となった。⁽³⁴⁾

ここでの他の登場人物としては、当初の艦隊司令官のバトリキオスのヨハネス [766] がいるが、彼のその後は不明である。ともかく、艦隊の水兵たちにより首都は荒らされ、レオンティオス派の司令官たちはムチで打たれ、財産没収の上、追放されたとある。さらに、ティベリオス三世は、自分の兄弟のヘラクレイオス [758] を全騎兵テマタ（テマの複数形）のモノストラテegos（単独司令官⁽³⁵⁾）に任命し、彼をカッパドキアとクレイスラの地域をパトロールするよう、外敵への防衛に送り出した。

(c) 七〇五年、ユステイニアノス二世がブルガリア人を率いて皇帝に再登極

ここでの出来事の詳しい経緯については稿を改めることにしたい。ともかく、ニケフォロスは若干の付き人ともにブルガリア人の君主テルヴェルの支援を受け、首都城壁前までブルガリア軍とその同盟者であるスラヴ人たちとともに進軍し、七〇五年に巧みに町に侵入して政権に返り咲くことに成功した。⁽³⁶⁾

復位したユスティニアノスは、クビクラリオスのテオフィラクトス [827] を北方のハザール汗国に使わし、娘と息子と呼び寄せた。七〇七／八年にブルガリアとの関係が決裂すると、全騎兵テマタをトラキアに移し、艦隊を組織して、陸と海から親征を実施したが、戦いには敗北し、皇帝は船で都に逃げ帰ったという。⁽³⁷⁾

(d) 七一年、ケルソン市と艦隊の反乱とフィリッピコス＝バルダネスの擁立・篡奪

七一年、皇帝はケルソン市への報復遠征を計画する。艦隊を指揮するのはパトリキオスのマウロス＝ベッソス⁽³⁸⁾ [914] とパトリキオスのステファノス＝アスマクトス [981]。新たにケルソンの統括を任されたのはスパタリオス (パトリキオスより下位の爵位)⁽³⁹⁾ のエリアス [144] で、無抵抗のケルソンを占領して虐殺を断行した。遠征軍が帰路で嵐に遭遇して崩壊すると、ニケフォロスは再び艦隊を組織して一層の虐殺を指示したが、これにはケルソン市の前述のエリアスや追放中のバルダネス (後の皇帝・バルダネス＝フィリッピコス [6150]) が立ち上がった。皇帝はさらに、パトリキオスで税務長官のシリア人ゲオルギオス [2105]、市総督のヨハネス [2956]、そしてトラケシオイのトゥルマルケスのクリストフォロス [1093] らを三〇〇名の部隊とともに派遣するも、しかし、計略にはまって彼らは捕虜となり、以上の三名は殺害され、バルダネスが皇帝と宣言された。皇帝はさらに艦隊を増設して、前述のマウロス＝ベッソスを派遣したが、今回の軍隊はバルダネス側に寝返った。皇帝がオプシキオンとトラケシオイの部隊とともに首都を離れている間に、攻め上った反乱軍は首都を奪取した。フィリッピコスは、前述のマウロスとスパタリオスのヨハネス＝ストルトス [2958] に皇子ティベリオス [8490] を殺させ、パトリキオス筆頭にしてオプシキオンのコメスのバラスバクリオス [743] も捕えて殺害した。皇帝軍には前述のエリアスを派遣したが、部隊の寝返りにより皇帝は殺害され、首はスパタリオスのロマノス [6415] の手で新皇帝のもとに届けられた。⁽⁴¹⁾

(e) 七一三年、首都でのクーデタとアルミオス・アナスタシオス二世の擁立

フィリッピコスが午睡中にオプシキオンのプロトストラトル⁽⁴²⁾のルフォス [635] が当時トラキアにいたテマ軍団の一部隊を伴って首都に入場し、パトリキオスにしてオプシキオンのコメスであるゲオルギオス・ブラフォス [2107] とパトリキオスのテオドロス・ミューアキオス [7519] の命令で宮殿に殺到、皇帝を捕らえて、彼を盲目にしたが、このことに誰も気づかなかった。翌日に聖ソフィア大聖堂で、人々の前でプロトアセクレティス (尚書局長官) のアルテミオスが皇帝アナスタシオス二世と改名して戴冠された。その後間もなく、前述の陰謀首謀者と思われるゲオルギオス・ブラフォスとテオドロス・ミューアキオスが盲目にされ、テサロニケに追放された⁽⁴³⁾。

小林氏はこのクーデタについて、「テマ・オプシキオンの関与の度合いは限定的で」⁽⁴⁴⁾「実際にこの陰謀を主導していたのは、中央政府の有力な文官たちだった」⁽⁴⁵⁾とテマの関わりに否定的である。けれども、史料の記述は大雑把なものであり、頭からオプシキオン軍の関与を限定的と決めつけるには情報が少なすぎる。ともかく、前章で見たように、当時のオプシキオンのコメスは単なる地方の軍団指令官ではなく、中央政界に深く関与していた。史料からは、事件後に排除されたコメス (政府要人だが武官) のゲオルギオス・ブラフォスは、同じく処罰を受けたテオドロス・ミューアキオスと同様に、この陰謀の直接の首謀者だと読める。ともかく、事件の主導者を無理に文官たちに限定する必要はないだろう。

さて、新帝は「騎兵テマタに非常に有能なテマ長官たちを任命し、また文官たち *ta politika* には非常に学識ある者たちを任命した」⁽⁴⁶⁾。この人事措置によりレオン (後の三世 [429]) とアルタバドス [632] (後のレオンの娘婿) はそれぞれアナトリコイとアルメニアコイのストラテーゴスに任じられた⁽⁴⁷⁾。さらに皇帝は、イスラーム勢力による首都攻撃計画の情報をつかむと、パトリキオスで市総督のシノペのダニエル [1218] らを使節として派遣して情報収集に

努める一方、首都の防備を固める準備をした。⁽⁴⁸⁾

(f) 七二五年、オブシキオン軍の反乱とアナスタシオス二世の退位

イスラームの艦船が小アジア南西部に到来したとの知らせを受け、アナスタシオス二世は艦船にオブシキオンの兵士を乗せて、ロドス島への集結を命じた。この艦隊の司令官には、聖ソフィア教会の輔祭で、当時は税務長官であったヨハネス・パピョアナキス [2961] が任命された。⁽⁴⁹⁾ 艦隊が集結を完了して出撃しようとした時、オブシキオン軍はこれを拒否してヨハネスを殺害した。艦隊は散り散りとなったが、オブシキオンの将兵は都方面へと向かい、途中でテオドシオス (三世となる [7793]) なる徴税官を皇帝に押し戴き、首都に進軍した。これを知ったアナスタシオス二世は、親類に首都を任せてニケーアに出陣した。反乱軍はオブシキオン領内で兵力を増強し、商船を獲得して陸と海からクリュソポリスに至った。内戦は半年に及んだというが、オブシキオン軍は首都を手に入れ、総主教や皇帝派の将校たちを捕らえた。結局、ニケーアにてアナスタシオス二世は身の安全と引き替えに降伏し、テサロニケに追放となった。彼の統治期間は一年三ヶ月であったという。⁽⁵⁰⁾

以上をまとめておこう。残念ながら、明確に言える事柄はそう多くはない。

とりあえず言えるのは、(a) と (e) のような首都でのクーデタで新政権が誕生した場合、かなり近いうちに軍事反乱が勃発し、再び政権交代が起こっていることである。確かに、(e) ではオブシキオン軍の関与は認められるが、アナスタシオス二世の皇帝擁立は、オブシキオンのコメスのゲオルギオス・ブラフォスらにとって予想外の方法に展開し、間もなく彼は政権から排除されている。しばらくしてオブシキオン軍の反乱が起こっているから、(e)

を首都でのクーデタと見ておきたい。

次に、艦隊の反乱と帝位篡奪が（b）と（d）とで確認できるが、あくまで遠征軍としての反乱であり、純粋に艦隊の将兵だけで蜂起したかどうかは怪しい。艦隊についての詳しい議論は別稿に譲るが、史料を読むかぎりでは遠征艦隊の司令官に任命されたのは、必ずしも艦隊の提督ではなかったようである。

さらに、一連の政権交代の後半において、オプシキオンのコメス、将校、兵士たちがしばしば姿を現している（d、e、f）。首都近くに位置し、さらにコメスは政府要人でもあっただけに当然のことかもしれない。これに対して小アジアの他のテーマ、トラケシオイは一度だけの言及で、アナトリコイとアルメニアコイは一切登場しない。この時期、イスラーム軍の攻撃を毎年のようにまともに受け、帝国防衛の矢面に立たされていたアナトリコイとアルメニアコイではあったが、政権では常に蚊帳の外の状態にあった。しかし、次の局面ではこの両ストラテegosと軍団が動くことになる。

三 レオン三世治下の動向

イスラーム軍による大規模な首都攻撃が差し迫る中、アナトリコイのストラテegosのレオンは、アルメニアコイのストラテegosのアルタバドスと同盟を結び、首都近くのニコメディアへと進んだ。⁽⁵²⁾「彼はテオドシオス（三世）の息子と遭遇し、皇帝の全奉仕者と宮殿の高貴な人々とともに彼を捕らえた」。これに対してテオドシオス三世は総主教ゲルマノス [298] や元老院と相談し、総主教は皇帝の身の安全を保証させた。⁽⁵³⁾

「そのこと（アラブ軍のコンスタンティノープル攻略作戦）を知ると、軍隊や行政の要人たちは、テオドシオスの

経験不足と敵軍に対抗する能力がいかにかけていたかを（知って）、彼に対して帝権を手放し、私人として平穩に暮らすように勧告した。かくて彼は一年間帝位にあつて引退した⁽⁵⁴⁾」。

こうして皇帝に即位したレオン三世は、休む間もなくイスラーム軍との首都包囲戦を戦うことになった。激戦に勝利した後（『テオフィアネスの年代記』）かあるいはその直前（ニケフォロス『歴史抄録』）、注目すべき記述がテオフィアネス年代記には残されている。

それはレオン三世に長男のコンスタンティノス（後の五世 [3703]）が誕生し、その洗礼を執り行った時のエピソードである。筆者が注目したいのは、有名な洗礼盤での尾籠な話ではなく、次の文言である。

「洗礼を受けた彼（コンスタンティノス）を、テマタと元老院の傑出した人々が受け入れた」⁽⁵⁵⁾。

将来、皇帝レオンを継ぐであろう息子の保証人の中に、中央政府の要人たちで構成される元老院だけでなく、いやそれよりも先にテマの関係者に言及がなされているのである。これは前例のない出来事であつた。他に傍証が存在しないため、断定的なことは言えないが、それでもレオンが息子の将来を真つ先に誰に託していたのかがわかる一文であらう。

さて、首都陥落の危機は脱したとはいえ、発足直後のレオン三世の政権はいまだ前途多難であつた。おそらく首都包囲の最中、シチリア島で動きが見られた。テマシチリアのストラテegos、セルギオス [659] が新たに自分たちで皇帝を選んだのである。選出されたのは彼の仲間で、コンスタンティノープル生まれのグレゴリオス⁵⁶オノマゲロス [2379] の息子バシレイオス [849] であつた（彼はティベリオスと改名）。

この事態について知らせを受けたレオン三世は、彼自身の身内のカルトゥラリオスのパウロス [5815] を、パトリキオスにして新たなシチリアのストラテegosとして派遣した。パウロス一行はシチリアに到着するとシラクサに入

り、首都が健在であるとの皇帝の書簡（サクラ）を読み上げた。住民たちはレオンを皇帝と歓呼した。僭称者バシレイオスとモノストラテュゴスのゲオルギオス〔2108〕は斬首となり、その他の関係者も処罰され、結果、西方に平和が戻ったという。⁽⁵⁷⁾

さらに、やはり首都包囲戦の直後であろう、アナスタシオス二世の復位を狙う事件が起こった。首謀者は、『テオファネスの年代記』では首都にあったマギストロスのニケタスクシュリニテス〔5372〕で、ニケフォロス『歴史抄録』ではアナスタシオス二世（アルテミオス）本人となっている。ともかく、テサロニケにいたアルテミオスはブルガリアの支配者テルヴェルの下へと逃れ、彼らの軍隊とともに首都へと向かった。一行にはアルテミオスの仲間であるブルガリアに滞在していたパトリキオスのシシンニオス＝レンダキス〔6752〕も同行していた。しかし、レオン三世はブルガリア人を懐柔し、アルテミオスとテサロニケの大主教を引き渡させることに成功した。また、ブルガリア人たちはシシンニオスを斬首にして首を皇帝に送り、故郷に引き返した。皇帝はアルテミオスとニケタス、そして大主教の首を刎ねた上で、さらに事件の関与者を処罰した。すなわち、パトリキオスでオプシキオンのコメスであったイソエス〔3518〕、アナスタシオス二世下でプロトアセクレティス（アナスタシオス二世即位前の官職、尚書局長官）であったテオクティストス〔8033〕、そして城壁長官のニケタス＝アントラックス〔5371〕たちで、彼らはアルテミオスの一味として死刑となった。皇帝は他の者たちを、鼻を削ぎ、財産没収の上、追放とした。⁽⁵⁹⁾

この事件は、かつてアナスタシオス二世を支持していた人々が誰であったかを明らかにしてくれはする。しかし、彼らが一掃された今、レオンは首都の高官たちの支持を確固として獲得しえたであろうか、それを史料から読み取ることは困難である。

さて、しばらくすると反乱がエーゲ海方面でも勃発した。それは両史料では七二六年のレオン三世によるイコノク

ラスム開始への反発として述べられている。七二七年頃「ヘラスとキュクラデス諸島に住む者たち（あるいは、軍隊とも読める）」が互いに協力してレオン三世に対して反乱を起こした。新たな皇帝にはコスマス「4093」なる人物が選ばれ、テマ＝ヘラスのトゥルマルケスのアガッリアノス「113」とステファノス「684」が指揮を執って首都を目指した。しかし、コンスタンティノープルを前にして、反乱者側の艦隊はギリシア火を搭載した皇帝側の艦隊に撃退された。アガッリアノスを含む多くの者が戦死し、皇帝側に寝返る者も出た。最終的にコスマスとステファノスは斬首に処された。⁽⁶⁰⁾この反乱鎮圧をきっかけに、レオンの政権はバルカン側のテマの掌握にも着手しただろう、と推測しておきたい。

最後に、レオン三世の政権を支えた人々が誰であったを知る機会がもう一度だけ残されている。それが彼の死の直後に勃発した大反乱、アルタバストスの乱の登場人物たちである。⁽⁶¹⁾

レオン三世の死去のすぐ後、七四一年六月、新帝コンスタンティノス五世はアラブ人に向かって進軍し、オプシキオンのクラスロスという場所に来たが、一方でアルタバストスの率いるオプシキオン軍はドリュライオンにあって両者はにらみ合い状態となった。コンスタンティノスの方から、甥にあたるアルタバストスの二人の息子に会いたいとの通知が届くが、アルタバストスはこれを人質要求と解釈し、皇帝との対決の決意を自軍に伝えた。彼の下に送られた皇帝からの使者、パトリキオスのベセル「1010」を殺して、オプシキオン軍は皇帝一行を攻撃した。コンスタンティノスはアナトリコイの拠点であるアモリオンへと逃亡し、そこで彼はストラテゴスのランキノス「423」から支持を受け、さらに自身の従兄弟で、トラケシオイのストラテゴスであったシシンナキオス「653」あるいはシシンニオス」をも味方に引き入れた。

アルタバストスは、シレンティアリオスのアタナシオス「668」を仲介者として、首都の留守を預かっていたバト

リキオスでマギストロスのテオフアネス＝モノテス〔809?〕に事態を説明した。テオフアネスは首都の人々を聖ソフィア聖堂に集めて、皇帝は死んで新たにアルタバストスがテマ^タによって、皇帝に宣言されたと伝えた。総主教アナスタシオス〔815〕と全ての人々はアルタバストスを皇帝として宣言した。すぐにテオフアネスはトラキアへ赴き、テマ^マトラキアのストラテ^テーゴスであったアルタバストスの息子ニケフォロス〔826〕に、自軍を率いて首都を守るように伝えた。アルタバストスがオプシキオンの軍隊とコンスタンティノープルに入場した後、皇帝コンスタンティノスもトラケシオイとアナトリコイの軍勢を率いてクリュソポリスに到着したが、一旦アモリオンに戻って越冬した。⁽⁶³⁾

コンスタンティノスとアルタバストスとは、それぞれがイスラームのカリフに使節を派遣して同盟を求めたという。前者が送ったのがスパタリオスのアンドレアス〔837〕であり、後者がロゴテテス（政府高官だろう）のグレゴリオス〔838〕であった。⁽⁶⁴⁾

また、アルタバストスは、もう一人の息子のニケタス〔837〕をモノストラテ^テーゴスに任命してアルメニアコイ^イテマに送り、前述の息子ニケフォロスを総主教アナスタシオスによって戴冠⁽⁶⁵⁾させた。

翌年五月、アルタバストスはオプシキオンの領域に進出し、軍隊を徴募した後、トラケシオイ領域（アジア）へと進軍し、略奪した。コンスタンティノスは、サルデイス地域に至り、ついに両者は衝突したが、アルタバストスは敗退してキュジコスへ逃れ、そこから海路首都へと逃げ帰った。八月にモノストラテ^テーゴスのニケタスがニケーア近くでコンスタンティノスと戦ったが、こちらも敗走する。アルタバストスの従兄弟でバトリキオスのアルメニア人トリダテス〔848〕が戦死するなど、両者ともに被害は大きかったという。⁽⁶⁶⁾

九月、コンスタンティノスはカルケドンからボスフォラス海峡をトラキアへと渡った。一方、トラケシオイのストラテ^テーゴスのシシンニオスはアビュドス経由でダーダネルス海峡を渡り、両者は首都を陸から包囲した。コンスタン

ティノスは黄金門まで進んで、自らの健在を見せつけ、その後は近郊の聖ママス付近に野営した。「海のテマ」であるキビュライオタイもコンスタンティノスに与していたようで、包囲の継続は町の窮乏を引き起こした。そこでアルタバドスは書記の前述のアタナシオスと自身のドメステイコスのアルタバドス〔634 同名の別人〕を派遣して、船で必要物資の確保を狙ったが、キビュライオタイの艦隊がアビュドスのそばで待機していて、物資を満載した船は拿捕された上、両名は捕えられた。皇帝は穀物を自軍に配分し、両名の視力を奪った。

その後、アルタバドスは城壁から討つて出たが、コンスタンティノスの軍勢に敗退し、前述のマギストロスのモノテスらが討ち死にした。そこで、アルタバドスは艦船を建造して、今度は海上から聖ママスを攻めたが、キビュライオタイの艦隊に追い払われたという。首都内は深刻な飢餓状態に陥り、物価が急上昇し、アルタバドスはやむなく住民が町を出るのを放任せざるを得なくなった。

一方、モノストラテゴスのニケタスは、一旦は散り散りになった軍隊を再度結集してクリュソポリスまでやってきた。しかし、コンスタンティノスは海峡を渡って彼を追尾し、ニコメディアで彼に追いつき、クラトル(67)のマルケッリノス〔481〕の首を刎ねる一方、ニケタスを捕らえた。さらに七四三年の十一月、コンスタンティノスは首都の陸城壁の突破に成功すると、アルタバドスはパトリキオスのバクタンギオス〔537〕とともに船でオプシキオンの領域へと逃亡を図った。しかしついに捕らえられ、皇帝はアルタバドスと二人の息子を盲目にし、バクタンギオスは首都のキユネギオンで首を刎ねられた。町では残酷な略奪が多くあったと史料は記している。皇帝はヒツポドロームで戦車競技を開催して、ここで盲目の捕虜たちを見世物にしたという。

このようにして反乱は終結を見たが、コンスタンティノスの側で戦った、トラケシオイのストラテゴス、シシンニオスは、皇帝の従兄弟であったのに、後日陰謀の咎で盲目の判決を受けたという。(68)

以上が、コンスタンティノス五世とアルタバストスが小アジアを中心とするテマを二分して戦った大反乱のおおよその顛末である。

ここに登場する人々は一四名余を数えるが、「混乱の二〇年」の時期と異なり、首都の勢力とおぼしき人物の活躍はあまり目立たない。首都の役人・高官、あるいはアルタバストスの配下とおぼしき者たちは次々と命を落としたり、視力を失っている。

包囲が長く続き、都が惨状を呈しても、総主教や元老院などが登場して仲介するようなこともなかったようである。総主教アナスタシオスは内乱後も地位を維持したのだが。

コンスタンティノス五世はオプシキオンの領域分割を実施して新たにテマ「ブケラリオイ」を創設する⁽⁶⁹⁾。また、やがて皇帝の周辺には別途、近衛連隊のタグマが組織され、おそらくオプシキオンは通常のテマの地位に降格となったと見られる⁽⁷¹⁾。

本題に戻って、この大反乱の情報から、レオン三世時代の政權構造をどれだけ推測することができるか。反乱は小アジアの諸テマとバルカン側のテマ「トラキア」が真つ二つになることで起こったが、それまでのレオン三世の治世後半は平穏な状態が続いていた。このことはコンスタンティノス五世の治世にも当てはまり、テマによる反乱や騒擾は七九〇年頃まで確認されない。筆者は帝国内の平和は諸テマが皇帝を中心に一つにまとまることによって維持されていたと見る。レオン三世期は、アナトリコイがレオンを支持する勢力の中枢にあり、またアルメニアコイは彼の盟友で娘婿のアルタバストスの息のかかった者が押さえていただろう（よって反乱時にすぐにアルタバストスを支持した）。トラケシオイのストラテゴスであったのはレオンの甥のシシンナキオス（シシンニオス）であり、八世紀初頭の不安定要因であるオプシキオンはアルタバストス自身が押さえていた。また、トラキア「テマ」のストラテ

ーゴスはアルタバストスの息子ニケフォロスが務めていた。なお、「海のテーマ」キビュライオタイについては詳しくは別稿に譲るが、レオンへの忠誠が第二次首都包囲があるいは七二七年の海上での反乱以来続いていた。

以上、あまり実証性は高くないが、それでも小アジアのテーマをまとめる形での政権という姿がおぼろげながら浮かんでくるように思うが、どうであるうか。一方で、かつての混乱期にはしばしば確認できた首都勢力の独自の動きは、アルテミオスの篡奪計画が頓挫して以降は影を潜めている⁽⁷²⁾。

おわりに

七世紀に至るビザンツ帝国においては、例外はいくつかあるものの、軍指揮権と民事行政権は峻別され、文武の担当者に分けるという原則、いわゆるディオクレティアヌス・コンスタンティヌス体制が維持されていた。その下では、六八〇年の公会議臨席のリストや六八七年のユステイニアノス二世の書簡が示すように、軍隊はオプシキオンを除くなら、さほど高い地位を占めているようには見えない。

ところが、九世紀中頃に降に残されている、帝国官職の序列を表す史料「タクティコン」からは、帝国の位階の上位は圧倒的に武官が独占していたことがわかる。そこではアナトリコイ⁽⁷³⁾（武官最上位）、アルメニアコイなど小アジアのテーマのストラテーターゴスたちが地方の行政をも兼務するテーマ長官として、中央政府の閣僚に相当する文官たちよりも遙かに高い地位にあったのである。

このような変化は何によって生じたのであろうか。常識的に考えるならば、対外的な危機が続く中でテーマが何らかの大きな役割を果たしたことを反映していると考えるのが妥当だろう。要するに、ビザンツ帝国は七世紀から八世紀

にかけて、どこかで大きく軍事優位へとシフトしたということである。それは、多くの研究者が認める仮説だといっても支障はないと思う。では、それはいつなされたのか。アナトリコイの優位はどうして生じたのか。

筆者の推測ではあるが、レオン三世がアナトリコイのストラテegos出身であり、小アジアのテーマを糾合して政権を樹立したこと、そしてそのような政権形態が一定期間継続されたことを想定することに事態の変化の原因を求めるのは空想にすぎるであろうか。

ちなみに、レオン三世から約一世紀の後、再び帝国は対外的な危機に見舞われていた。今回は西方のブルガリアが首都の城壁に迫ったのである。この時、反乱を起こしたレオン（後の五世「メサ」）もまた小アジアのテーマに擁立されたアナトリコイのストラテegosであった。

この時も、七一七年によく似て、戦争から逃げ帰った皇帝と彼を取り巻く総主教らの政府要人たちは、どうしたのかと、あれこれ談合を重ねている。⁽⁷⁴⁾しかし、彼らの選択や決定は、七一七年の時と同様「帝国全体の支配のためのキヤステイングボートを握る形になって」いたと言えるだろうか。⁽⁷⁵⁾

「中央政府の有力者たちの果たしていた役割を軽視するべきではない」。⁽⁷⁶⁾それは当然であろう。けれども、考察を加える時期ごとに、どの勢力が政権を維持するためにより大きな力を発揮していたかどうかを勘案すること、それこそが本来の意味で政権の、ひいては皇帝選出の「ダイナミックス」を明らかにすることに通じると思うのである。

註（１）領土の喪失については、例えば、Haldon, J., *The Palgrave Atlas of the Byzantine History*, London, 2005, p.58, Map.5.1などを参照。

（２）七二六年に始まり八四三年まで断続的に継続された聖画像破壊運動、いわゆるイコノクラスムもまた「暗黒時代」を強く印象づける。拙稿「イコノクラスムの時代について——八世紀のビザンツ——」『待兼山論叢』（史学篇）、二六号、一

- 九九二年、六三―八七頁を参照。また例えば、ピーター・ブラウンも「暗黒時代」という用語を用いる。Brown, P., *A Dark-Age Crisis : Aspects of the Iconoclastic Controversy*, *English Historical Review* 88, 1973, pp.1-34.
- (3) 拙稿「テマ反乱とビザンツ帝国―「テマ・システム」の展開―」『西洋史学』一四四号、一九八七年、二二―四〇頁：同「テマの発展―軍制から見たビザンティオン帝国―」『古代文化』四一卷二号、一九八九年、八―二二頁。
- (4) Lillie, R. -J., *Die byzantinische Reaktion auf die Ausbreitung der Araber, Studien zur Strukturwandlung des byzantinischen Staates im 7. und 8. Jahrhundert*, München, 1976; Kaegi, W. E. Jr., *Byzantine Military Unrest 471-843 : An Interpretation*, Amsterdam, 1981; Treadgold, W. T., *The Byzantine Revival 780-842*, Stanford, 1988.
- (5) 例えば、Rochow, I., *Kaiser Konstantin V (741-775), Materialien zu seinem Leben und Nachleben*, Frankfurt a. M., 1994; Lillie, R.-J., *Byzanz unter Eirene und Konstantin VI. (780-802)*, mit einem Kapitel über Leon IV. (775-780) von Ilse Rochow, Frankfurt a. M., 1996; Speck, P., *Kaiser Leon III., Die Geschichtswerke des Nikephoros und des Theophanes und der Liber Pontificalis*, 2 Bde., 2002/2003 451-468頁。
- (6) Lillie, R.-J. et al. (Hrsg.), *Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit. Abteilung I (641-867). Prolegomena und 6 Bde.*, Berlin/New York, 1998-2002. なお、本稿での主な登場人物には、この研究の番号を原則として「」にて提示する。
- (7) 小林功「最後の「海の軍人皇帝」：レオン三世とビザンツ艦隊」『オリエン特』四五卷一、二〇〇二年、一八―三六頁：同「八世紀前半におけるビザンツ皇帝選出のダイナミックス―混乱の時代―の皇帝たち」『史林』八六卷一、二〇〇三年、七一―〇〇頁（以下「ダイナミックス」と略記）。
- (8) さしあたり、拙稿「テマからテマ制へ―テマ制度の成立時期をめぐって―」『待兼山論叢』（史学篇）二二号、一九八七年、二九―五〇頁を参照。レオン六世（在位 八八六―九二二年）は『軍事書』の中で、ストラテギーゴスの行政権掌握について述べている。Dennis, G. (ed./tr.), *The Taktika of Leo VI, CFHB*, Washington D. C., 2010, 1. 11 (p.14).
- (9) Boor, C. de (ed.), *Theophanis Chronographia*, vol.1, 1883, Leipzig (以下 *Theophanes* と略記) p.290 (AM 6094 : 601/2年) : p.300 (AM 6103 : 610/1年) : p.303 (AM 6113 : 621/2年)。九世紀初頭に修道士テオファネス [810?] が最終的に編纂したとされる年代記で、七世紀頃から九世紀初頭までがこの時代を知るための基本史料となる。詳しくは以下の訳と注釈を参照のこと。Mango, C. & R. Scott, *The Chronicle of Theophanes Confessor : Byzantine and Near Eastern*

- History*, AD 284–813. Oxford, 1997 (以下 Mango へ略記) ; Rochow, I., *Byzanz im 8. Jahrhundert in der Sicht des Theophanes. Quellenkritisch–historischer Kommentar zu den Jahren 715–813*. Berlin, 1991.
- (10) Mango, C. (ed./tr.), *Nikephoros Patriarch of Constantinople. Short History*, Washington D. C., 1990 (以下 Nikephoros と略記). こちらは六〇二年から七六九年までの出来事を記録した歴史史料で、記述内容は多くの部分で『テオファネスの年代記』と重複するが、おおむね簡潔な記述となっている。なお『テオファネスの年代記』の方は、その成立の経緯から、シリア・パレスティナ系の記述を別途含んでいる。
- (11) *Theophanes*, pp.348–350 (AM 6159). この人物や事件には不明な点が多い。
- (12) *Theophanes*, p.352 (AM 6161 : 668/9). cf. Turner, D., *The Trouble with the Trinity : The Context of a Slogan during the Reign of Constantine IV (668–685)*, *Byzantine and Modern Greek Studies* 27, 2003, pp.68–119.
- (13) 誤りで、実際にはすでに三名と六五九年に戴冠された。cf. Mango, p.492 n.1.
- (14) 爵位のパトリキオス patrikios にては、Kazhdan, A. et al. (eds.), *Oxford Dictionary of Byzantium*, 3 vols., Washington D. C., 1991 (以下 ODB と略記), p.1600 を参照。また爵位の一覧表としては、井上浩一『ビザンティン帝国』岩波書店、一九八二年、一二五頁がある。
- (15) この人物はコンスタンティノス四世の政府の要人で、クビクラリオス(宮廷宦官)のアンドレアス [353] とともに活躍が確認される。cf. *Theophanes*, pp.351–352 (AM 6160–1).
- (16) *Theophanes*, pp.341–342 (AM 6133). cf. Nikephoros, ch.31.
- (17) *Theophanes*, pp.341–342 (AM 6134).
- (18) Mamisi, J. D. (ed.), *Sacrorum Conciliorum Nova et Amplissima Collectio*, Firenze, 1759–1788, (rep. 1901), tom. XI, 209 A–C, [= Riedinger, R. (ed.), *Concilium universale constantinopolitanum tertium*, Berlin, 1992, (Acta conciliorum oecumenicorum, ser.2, v.2), pars 1, Concilii actiones I–XI, pp.14,20–21 ; 26,21–22 ; 36,2–3 ; 46,25–26 ; 160,23–24 ; 170,16–17 ; 180,20–21 ; 190,17–18 ; 262,17–18 ; 278,17–18 ; 400,17–18 ; pars 2, Concilii actiones XII–XVIII, p.752, 16–17]. cf. Lile, R. –J., “Thrakien” und “Thrakeseion” : Zur byzantinischen Provinzorganisation am Ende des 7. Jahrhunderts, *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 26, 1977 (以下 Thrakien へ略記), S.7–47, 8.

- (19) *magister officiorum* についての詳細は、Kazhdan, A., *ODB*, p.1267.
- (20) 正確には、テオドロスの官職には「トラキアのモノストラテegos」という名がさらに付加されている。これは六八〇年に帝国内に侵入したブルガール人に対抗するための全軍を彼が率いていたがゆえのものと推測される。cf. *Theophanes*, pp.358-359 (AM 6171). 近衛兵団については、Haldon, J. F., *Byzantine Praetorians*, 1984, Bonn (以下 *Praetorians* と略記) pp.136-141を参照のこと。なお、史料では他に軍務長官や財務長官などの名前が挙がっている。
- (21) Mansi, *op. cit.*, tom. XI, 737 B-738 A. [= Riedinger, *op. cit.* (Acta conciliorum oecumenicorum, ser.2, v.2) pars 2, p.886.] cf. Liile, Thrakien, S.13.
- (22) エクスタビトルと同じく、儀仗兵団のスコライのことだとされる。cf. Haldon, *Praetorians*, p.132-150.
- (23) リーリエは、これは首都の文官たち全体を指すものとする。それは『テオファネスの年代記』が別の箇所で「タ・ポリティカ politika」と呼ぶものと同じ (Theophanes, p.383 (AM 6205) : Liile, Thrakien, S.13-14)。しかし、話題は軍隊に移っており、かつ儀仗兵団への言及箇所挟まった位置にある。直訳すれば「民衆の組合」で、ハルドンは古代末以来の馬車競技の青と緑の党派のこととしている。cf. Haldon, *Praetorians*, p.161-162.
- (24) Haldon, *Praetorians*, pp.164-166.
- (25) 七八六年当時、バルカン半島にはすでにテマトラキアが存在した可能性があり、この軍団をそちらと読むことは不可能ではない。けれども、リーリエの研究が発表されて以降、トラケシオイ説が有力で、筆者もこちらを支持する。ただしトラキア=テマのこととするイコノミダスの説もある。cf. Nesbitt, J. and N. Oikonomides (eds.), *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art*, vol.3 : West, Northwest, and Central Asia Minor and Orient, Washington D. C., 1996, p.2.
- (26) カラビシアノイや艦隊については別稿にて考察予定である。
- (27) Hitchner, R. B. H., 'Septem', *ODB*, p.1870.
- (28) 小林氏はいくつかの論文でシチリア島やその艦隊の重要性を力説しているが、この史料ではシチリア島に軍隊の存在は直接的には確認できない。小林論文「最後の「海のビザンツ皇帝」」など参照。
- (29) cf. Pertusi, A. (ed.), *Constantino Porfirogenito De Thematibus*, Vaticano, 1952, pp.68-69.

- (30) テマとしてのヘラスの史料上の初出。古代末期に起源を持つ小アジア側のテマに対し、バルカン側や西方のテマは、地域防衛の軍団・軍管区として、帝国政府の施策として創設された可能性が高そうである。
- (31) *Theophanes*, pp.368-369 (AM 6187), *Nikephoros*, ch.40.
- (32) クレイスーラとは「山道・隘路」の意味だが、後にはテマに昇格する前の辺境軍管区を意味した。ここでもその意味かどうかはよくわからなう。cf. Kazhdan, 'Kleisoura' *ODB*, p.1132.
- (33) ドゥルンガリオスはストラテegosよりは下位の官職だが、艦隊では提督という地位であるケースも多い。詳しくは Geer, E. M., 'droungarios', *ODB*, p.663.
- (34) *Theophanes*, pp.370-371 (AM 6190), *Nikephoros*, ch.41.
- (35) *Theophanes*, p.371 (AM 6190). cf. Mango, p.550 n.4.
- (36) *Theophanes*, p.374 (AM 6196-7).
- (37) *Theophanes*, p.376 (AM 6200). cf. Kazhdan, 'koutikourarios', *ODB*, p.1154. 皇帝はイスラームの攻撃に対し、テオドロス・カルテルカス [7520] とテオフェラクトス・サリバス [8272] の二人のストラテegosを派遣したが惨敗している (*Theophanes*, p.377 (AM 6201)).
- (38) 彼は *Bessos* というあだ名を持つことから、『聖デメトリオスの奇跡』に登場するブルガリア人族長のマウロス [4911] と同一人物という説がある (Mango, p.530 n.4)。cf. Lemerle, P. (éd.), *Les plus anciens recueils des miracles de saint Démétrius*, 2 vols., Paris, 1979/1981, vol.1. Texte, pp.227-234; vol.2. Commentaire, pp.151-153.
- (39) スパタリオスについては Kazhdan, 'spatharios', *ODB*, 1935-6°.
- (40) トゥルマルケスとはテマ軍団のナンバーワンで師団長格。cf. Kazhdan, 'tourmarches', *ODB*, pp.2100-1.
- (41) *Theophanes*, pp.377-381 (AM 6203), *Nikephoros*, ch.45.
- (42) フロトストラトルにこそば Kazhdan, 'protostrator', *ODB*, p.1748-9°.
- (43) *Theophanes*, p.383 (AM 6205). cf. *Nikephoros*, ch.48.
- (44) 小林「ダイナミックス」八二頁。
- (45) 同上、八三頁。

- (46) *Theophanes*, p.383 (AM 6206). cf. *Nikephoros*, ch.49.
- (47) *Theophanes*, p.386 (AM 6207).
- (48) *Theophanes*, p.384 (AM 6206), *Nikephoros*, ch.49.
- (49) *Theophanes*, p.385 (AM 6207). 艦隊司令に七一〇／一年に税務長官と市総督が任命されたのと同様、文官が指名されている。異例ともいえるが、類例もある。例えば、八世紀後半にテマの支持を得られていなかった摂政エイレーネーは、政府要人の宦官たちを遠征軍の司令官として派遣している。拙稿「八世紀後半のビザンツ―エイレーネー政権の性格をめぐって」『西洋史学』一七四号、一九九四年、三六―五三、四四頁を参照されたい。
- (50) *Theophanes*, pp.385-386 (AM 6207), *Nikephoros*, ch.50, 51. テオドシオス三世についてはティベリオス三世の息子説があるが、詳細は不明である。cf. Summer, G. V., *Philipicus, Anastasius II and Theodosius III, Greek Roman and Byzantine Studies* 17, 1976, pp.287-294.
- (51) 注(5)で挙げた、レオン三世時代を扱うP・シュベックの遺作は、彼独自の詳しい史料記述研究のスタイルを取っており、本稿ではあまり活用できなかったことを告白しておく。
- (52) 「アナトリコイのストラテーゴスのレオンはアルテミオスのために戦い、テオドシオスには従わなかった。彼はアルメニア人でアルメニアコイのストラテーゴスのアルタバストスと結んで、彼に自分の娘を妻に与えることに同意し、彼はそれをなした」(*Theophanes*, p.386 (AM 6207))。
- (53) *Theophanes*, p.390 (AM 6208). なお、小林氏はテオドシオス三世の息子はオプシキオンのコメスだったと推測しているが証拠はない。当時のオプシキオン軍の動向も不明である。
- (54) *Nikephoros*, ch.52. なお、小林氏は、両史料の記述から「テオドシオス三世を最終的に引退に追い込んだのは、レオンやアルタバストスではなく、中央政府の要人たちだった」(『ダイナミックス』九四頁)という。さらに、総主教ゲルマノスに注目して、彼を中心とする「元老院議員たち」や「行政府の要人たち」は「元はアナスタシオス二世を支持し、彼の政権を支えていた人々であると考えられる」(同上)という。しかし、少なくとも後半部分の推測は証拠不十分である。論文のこの箇所(段落含む)に注は付されていない。

さらに推測は続く。首都の要人たちがレオンを支持したのは、「首都の有力文官たちが元来アナスタシオス二世の政

權を支持して人々であり（前段の推測が事実に昇格！ 中谷）、同じくアナスタシオス二世によって拔擢されたレオンと何らかの關係を持っていたからである」という（同、九五頁）。しかし、これも推測であり、この段落にも注はない。

- (55) *Theophanes*, p.400 (AM 6211) 日付は不明であるが、七一八／九年の項目で記述。
- (56) Kazhdan, 'chartoularios', *ODB*, p.416.
- (57) *Theophanes*, p.398 (AM 6210) 七一七／八年の項目で記述。cf. *Nikephoros*, ch.55.
- (58) トキステロスは *magister officiorum* (注61) が後に爵位化したものである。
- (59) *Theophanes*, p.400-401 (AM 6211), *Nikephoros*, ch.57. cf. Mango, p.553 n.12.
- (60) *Theophanes*, p.405 (AM 6218). 七一六／七年の項目。cf. *Nikephoros*, ch.60.
- (61) なお、この反乱の経過については、時系列的に不明な点があり、議論がある。cf. Treadgold, W., *The Missing Year in the Revolt of Artavasdas, Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 42, 1992, pp.87-93.; Speck, P., *Artabastos, Der Rechtgläubige Vorkämpfer der göttlichen Lehren*, Bonn, 1981, S.19-77.
- (62) ミレンティアリオスについては、Kazhdan, 'silentarios', *ODB*, p.1896°.
- (63) *Theophanes*, pp.414-415 (AM 6233).
- (64) *Theophanes*, p.415 (AM 6234). cf. Kazhdan, 'logothetes', *ODB*, p.1247.
- (65) *Theophanes*, p.417 (AM 6234).
- (66) *Theophanes*, p.419 (AM 6235).
- (67) クラトルについては、Kazhdan, 'krator', *ODB*, pp.1155-6°.
- (68) *Theophanes*, pp.419-421 (AM 6235).
- (69) *Theophanes*, p.440 (AM 6258). ブケナリオイについては、Foss, C., 'Boukellarios', *ODB*, pp.316-7.
- (70) タグマについては、拙稿「タグマについて―八世紀ビザンツにおける近衛連隊の誕生―」『関西学院史学』三〇号、二〇〇三年、九四―一四頁を参照。
- (71) この点については、言及されるテマの序列という観点からリーリエが考察している。Lilie, Thrakien, S.18-26.

- (72) 小林氏は「レオン三世はコンスタンティノープルの有力文官たちと軍の双方の、完全な掌握にほぼ成功した」(『ダイナミックス』九六頁)というが、有力文官の掌握については情報がない。
- (73) Oikonomides, N. (ed.), *Les listes de préséance byzantines des IX^e et X^e siècles*, 1972, Paris, pp.47, 49, 51, 53, 101, 103 ; 井上浩一、前掲書、一二八—一二三〇頁。
- (74) *Theophanes*, p.492 (AM 6303) ; p.502 (AM 6305).
- (75) 小林「ダイナミックス」九九頁。
- (76) 同上。